

## 「ジャンプいじめリポート」内容分析

著者	桂田 恵美子
雑誌名	比較文化
号	4
ページ	149-161
発行年	1998
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1106/00000640/">http://id.nii.ac.jp/1106/00000640/</a>

## 「ジャンプいじめりポート」内容分析

桂田恵美子\*

「ジャンプいじめりポート」に掲載された全国各地からのいじめ経験者の11のインタビューと手紙155通の内容を分析した。いじめは小・中学時代に頻繁におこり、高校になると急激に減少し、男女とも心理的いじめ型、心理的ふざけ型のいじめが多かったが、物理的いじめ型・ふざけ型は男性に多く経験されるという性差が示された。また、いじめの形態が成長年齢に従って変化していくことが示唆された。いじめの理由は「異質排除」、「ストレス発散」、「妬み」の3つに集約でき、これらの理由が攻撃行動に及ぶメカニズムについて言及した。また、いじめに気づいていた教師や親の否定的対応を報告する者が多く、このことは親や教師のいじめ対応能力の開発・促進が現時点で出来るいじめ対策のひとつであることを示唆している。

In order to grasp a general picture of bullying in Japanese schools, the contents of 11 interviews and 155 letters published in the "Jump Bullying Report"(1995) were analyzed. The results indicate that most of bullying occurred during the elementary and junior high school years and decreased drastically in high school. Psychological bullying was much more common than physical bullying among both sexes and physical bullying was experienced by more males than females. The results also show that the type of bullying experienced changed according to age. Reasons for bullying or being bullied were summarized as "strong tendency of ostracize people who are different", "frustration", and "feeling of envy/jealousy". The mechanism by which these reasons lead to aggressive behaviors is discussed. Many victims reported lack of support from teachers and/or parents who were aware of the bullying. This result suggests that developing teachers' and parents' abilities to deal with bullying more effectively is needed.

### 問題

いじめ問題が世を騒がせて久しいが、最近では以前ほど学業児童間のいじめ問題が新聞紙上に賑わせることは少なくなった。確かに統計資料によると、いじめの発生件数は昭和60年度以降減少傾向にあるが（“総力取材いじめ事件”，1995）、それはいじめがなくなったことを意味しているわけではない。いまだにいじめに苦しむ子供たちは大勢いて、いじめが原因で自殺をしたり、登校拒否になったり、あるいは、学業成績が落ちたりと、いじめは将来ある青少年に多大な影響を与え、その健全な発達を阻むものであり、我々大人にとっても深刻に考えなければならない問題である。

今までにも多くの研究者あるいはジャーナリストがいじめ問題に取り組み、いじめに関する本も数多く出版されている。それらを読んでみると、いじめが発生する要因についてある程度のコンセンサスが見られる。まず、いじめの要因について諸研究者の見解をまとめてみたい。

### いじめの要因

渡辺（1986）は、いじめっ子の特性として幼い情緒、欲求不満耐性の不足、自己中心的思考、愛他心の欠如を指摘し、マスコミ文化、画一化社会、管理教育、受験体制、過保護・過教育の家庭教育、核家族化ときょうだい数の減少、家庭機能の低下等、現代日本社会の特徴がいじめっ子の特性を生み出していることを説明している。渡辺は、画一化社会、管理教育、受験体制

\*桂田恵美子：宮崎国際大学比較文化学部比較文化学科 〒889-1605 宮崎県宮崎郡清武町加納 1405  
Tel: 0985-85-5931, Fax: 0985-84-3396, e-mail: ekatsura@miyazaki-mic.ac.jp

が直接あるいは間接的に子供たちにストレスや欲求不満を起こさせ、いじめはそれらのストレスや欲求不満を解消する一つの現れであるという。更に同じ本の中で桜井（1986）は、遊びが極度に制限されている現代の子供たちは遊びを通しての欲求不満の解消が困難になってきており、遊びを通して学び身につける社会的ルール・スキル、欲求不満耐性の不足がいじめの発生に深く結びついていると説いている。

同様に井上（1986）も、いじめの心理は抑圧代償攻撃性によるものであり、いじめはある種のストレス解消法であるとの見方を支持し、受験教育や教師による体罰などがストレスの源としていじめの背景にあると説いている。また、現代っ子たちの対人関係能力の低さもいじめの背景としてあることを指摘し、この対人関係の未熟さは遊び経験の少なさからくるものであると述べている。稲村（1986）は、井上のいう対人関係能力の低さを対人困難性と呼び、その原因として小さいころから生の人間とつきあった経験が少ないことをあげている。そして、それは現代の少子化傾向の弊害であり、ひとり遊び機器の氾濫などの社会的要因とも密接に結びついているという。稲村もまた現代の子供たちの欲求不満状態の亢進をいじめの背景としてあげているが、稲村は日本的平等意識が欲求不満を高めるのに貢献していることを指摘している。その他に、家庭の要因として家庭の教育力の低下や問題解決力の欠如などをいじめの背景としてあげている。河合（1997）は、家庭の要因として物質社会による家族関係の稀薄化をあげ、子供たちがいじめから脱け出せずいじめが陰湿化している要因となっていると指摘している。この家族関係の稀薄化は田中（1996）も指摘していて、子供たちがいじめられても親に何も言わず自殺していく最近の現象は子供たちが家庭の中に所属の「場」を持っていないことの現れであるとしている。

こうしたストレスや遊びの不足による弊害を含めて、深谷（1995）は、いじめが多発する背景として以下の4つを挙げている。1）今日の子供が集団遊びの経験を持たないまま成長することによる、他人との共感性、愛他心、ソーシャル・スキルなどの心理的「きずな」の形成力の弱まり、2）日本人に特徴的な集団同調性、3）日本の競争社会による子供のストレス状態の高まりとそれを解消すべき遊びの不足、4）社会的弱者を自分と同様の人権をもつ対象とみなす福祉的態度の稀薄な風土。深谷は2）の集団同調性がなければ、ゲーム性を持った攻撃は個の個に対する攻撃でおわり、いじめには発展しないという。また、4）の福祉的態度の稀薄な風土は、渡辺（1986）のいう画一化社会とつながり、河合（1997）はそれを「異質なものを排除する傾向」と呼び、日本人には特にこの傾向が強いという。そして、この傾向は子供だけではなく教師にもあり、知らず知らずのうちにそうした態度が子供たちに伝わり、無意識のうちに教師が子供のいじめを支持している場合があると指摘する。詫摩（1995）はこの「異質排除」をいじめのより直接的な要因と見なし、いじめの理由を「異質排除」と「妬み、羨望、被圧迫感などの心理的不快感」の2つに分けている。土居・渡辺（1995）もいじめの加害者たちにはある種の妬みがあると述べている。

このように、現代の子供たちのストレスや欲求不満、対人関係の未熟さ、異質排除の傾向、妬みの感情がいじめの直接的あるいは背景的要因としてあげられることは多くの研究者の一致した見解である。そして、こうした要因をつくりだしているのは、受験教育・管理教育に代表される没個性の教育、遊びの不足、少子化による過保護な家庭教育、家庭の教育力の低下、家族関係の稀薄化等であるとの見方は多くの者が指摘している。

## いじめの実態調査

前述したいじめの背景を見ていくと現代の日本社会の特徴を反映していて、いじめは日本特有な現象であるかのように思われる。しかし、ノルウェー、イギリス、アメリカ等の外国でもいじめがあることが報告されている (Olweus, 1994; Boulton & Underwood, 1992; 矢部, 1997)。そこで、外国でのいじめと日本のいじめが果たして同じ性質のものであるかどうかという疑問が生じるが、小論はいじめの国際比較を目的とするものではないので、それは他の論文に譲るとして、そうした国際比較のためには日本のいじめの実態把握が必要である。また、いじめの実態を正確に把握することは、その対策を考える上でも重要である。

過去における実態調査は直接小学生、中学生あるいは大学生に質問用紙でいじめについて質問し調査したものがある (高野, 1986; 深谷, 1996)。こうした過去の研究はいじめの実態を報告しているが、その実態の描写はさまざまである。例えば、いじめの構造として、土屋

(1995) は被害者、加害者、傍観者の3層構造と考え、森田 (鈴木, 1995 より引用) はそれに観衆 (はやしたり面白がっている子) を加えた4層構造が密接にからまりあっていじめが起こっているという。更に細かく7群に分類する研究者もいる (鈴木, 1995)。また、いじめの形態としては、石崎 (1986) は直接的な暴力、間接的な暴力、言葉によるいじめ、無視の4種類に分類している。これに良く似た分類として、深谷 (1996) は悪口・からかい、いじわる・いたずら、無視・仲間はずれ、ふたれる・けられるの4つに分けている。一方、森田・清水 (1986) は第I群: 心理的いじめ型、第II群: 心理的ふざけ型、第III群: 物理的いじめ型、第IV群: 物理的ふざけ型の4群に分類している。いじめの理由についても、前項で述べたように詫摩 (1995) が大きく2つに分類しているのに対して、深谷 (1996) は、小・中学生の調査結果から「弱点や性格的特徴があったから」「威張っていた子への反感から」「成績のいい子への妬みから」「思い当たらない」の4つに分類していると同時に、国立の教育大学の生徒を対象にした回顧的調査で得たいじめる子どもの言い分を使って子どもたちがなぜいじめるのかを7項目にまとめている。このように、研究者によっていじめの実態のとらえ方はさまざまである。また、過去の実態調査ではいじめられた側の反応あるいは対策に関してあまり触れられていない。統計的なものとしては、いじめの終結に焦点をあて周りの者の対応を含めたいじめ終結の原因の報告があるのみである (深谷, 1996)。

このような過去の実態調査をふまえて、本研究はいじめがどうしておこるのかといういじめのメカニズム、そしてその対応・対策に重点をおいて、いじめ経験者からの手紙を分析することによって、より一般的ないじめの実態を捕らえようと試みた。

分析された手紙は、「週刊少年ジャンプ」に寄せられた1807通のいじめに関する手紙のうち「ジャンプいじめりポート: 1800通の心の叫び」(1995)に掲載された11のインタビューと155通の手紙である。「ジャンプいじめりポート」は寄せられた生の声を読者に伝えることを目的としているために、編集部での整理は必要最低限度とされ、掲載された手紙は全くランダムな選択であると報告されている。手紙は全国各地から寄せられ、その書き手は小学生から社会人までと、幅広い年齢層のいじめ体験談を掲載している。こうした書き手の年齢と住んでいる地域の多様性から、これらの手紙はデータとして貴重である。しかし、これらの手紙は現在進行中のいじめの体験談であったり、あるいは回顧的体験談であり、全て読者が自発的に「週刊少年ジャンプ」に送ったものであるから、全てが同じような形態になっているわけ

ではない。たとえば、ある手紙は現在受けているいじめの状況を報告するもの、また、ある手紙は自分の過去の経験からいじめ対策のようなものを書いているもの、先生の対応のまずさを訴えるものなど多様である。しかし、内容的にはある種の共通性も見出すことができる。そこで、この多様ないじめ体験談を分析することによって、現在のいじめがどのようなものなのか、いじめがどうして起こるのか、そして、その対策等について考察してみたいと思う。

## 方法

「ジャンプいじめリポート」は3つの章で構成されている。第一章「ケーススタディ—いじめの現場から」には、送られて来た手紙の中から選ばれた11人のインタビューが手紙といっしょに取められている。第二章では全国から寄せられた1800通の手紙の中からランダムに選ばれた210通の手紙が“いじめられて…”、“いじめて…”、“いじめって、何?”の3部に分けて掲載されている。そして、第三章の漫画「元気でっ」は土屋守・怜著「私のいじめられ日記」を漫画化したものである。いじめの体験談を分析するという目的から、本研究では、第一章の11のインタビューと第二章の“いじめられて…”、“いじめて…”に掲載された155通の手紙を分析した。“いじめって、何?”の部に掲載されたほとんどの手紙は体験談というよりいじめ問題に対する意見であり、それらはそれぞれの体験に基づいた意見であるかもしれないが、自己の経験したいじめに関する情報が得られないため、これら55通の手紙は分析対象から除いた。

それぞれのインタビューと手紙の内容は分析項目に従って数値化されコンピューターに入力された。分析項目は、年齢、性別のほか以下の項目である。

1) 被・加害者の別 本研究のデータの特質上細かい分類は適さず、土屋(1995)の3層構造(被害者・加害者・傍観者)を採用した。また、本研究のデータの中には被・加害者の両方であるとの報告も多く見られそれらを区別した。しかし、統計分析の際、被害者あるいは加害者いずれかに分類しなければならない場合は、「被・加害者両方」は、その手紙が掲載されているセクションに従って被害者または加害者のいずれかに分類された。つまり、その手紙が“いじめられて”のセクションに載っている場合は被害者とし、“いじめて”のセクションに載っている場合は加害者とした。

2) いじめ経験の時期 いじめは多くの場合長期間にわたるので、時期を小学校入学前、小学校時代、中学校時代、高校時代、大学時代、社会人になってからとに分け、それぞれの時期にいじめを経験したかどうか(経験した=1、経験しない=0)を識別した。例えば、小学校から高校にかけてずっといじめを経験したという人は小学校時代、中学校時代、高校時代のそれぞれの項に1と記入した。こうすることによって、どの時期にいじめが最も頻繁に起こっているのかを調べることができる。

3) いじめの形態 本研究では森田・清水(1986)の分類法を使用した。この分類法によると、第Ⅰ群:心理的いじめ型は仲間はずれ、無視、悪口を言う等を含み、第Ⅱ群:心理的ふざけ型は持ち物を隠す、無理矢理嫌がることをする、たたく・ける・つねるなどの小暴力等を含む。

第Ⅲ群：物理的いじめ型は相手に身体的・物質的被害を与えることを目的としていて、プロレスごっこなどと言って一方的になぐったり、お金や物をとりあげたり、おどしたりといった手口が含まれ、第Ⅳ群：物理的ふざけ型は心理的ふざけ型と似た性質をもつが、身体的攻撃性が強く、着ているものを脱がす、性的はずかしめなどの行為が含まれている。本研究では、暴力的いじめの動機・程度を手紙の中に読み取るのが不可能な場合もあり、心理的ふざけ型の小暴力なのか物理的いじめ型になるのかの分類が困難であった。それらの判断は全て手紙の表現に頼るほかなく、「殴る」「蹴る」「集団暴行」などの言葉で表されている時には物理的いじめ型とし、「たたく」「石やチョークを投げられる」「髪をひっぱる」「靴にガビヨウを入れられる」などの表現は小暴力とみなし心理的ふざけ型に分類した。

4) いじめの理由 本研究では6つの理由に分類し、その理由の有無を識別した。その6つとは、① 性格・行動的理由—暗い性格、おとなしい、まじめ、目立つ、はつきりしている、成績が悪い、スポーツ音痴、いじめられている者を助けた等、② 身体的理由—太い、小さい、天然パーマ、障害がある、病気がち等、③ 環境的理由—転校生、留年、部活、家が貧乏、親がアルコール中毒等、④ ストレス発散—いじめが楽しい、単なる遊び（ゲーム）、やつあたり、自分がいじめられたので等、⑤ 妬み—成績が良い、先生に気に入られている、⑥ 特別な理由無し—ムシが好かない、気に入らない、理由がわからないである。これら6つに属する理由が少しでも述べられている場合は、それぞれの理由有りとなした。よって、複数の理由が述べられている場合には、それぞれの理由項目に有りとコードされた。例えば、いじめた／いじめられた理由ははっきりわからないが、恐らく目立つ存在だったからだろうと述べている場合には、① 性格・行動的理由と⑥ 特別な理由無しのそれぞれに理由有りとした。

5) 反応・対策 本研究ではいじめの影響を見るためにより広範な個人の対応の仕方を調査した。手紙に現れたいじめられた後の行動は実にさまざまであるが、同じような行動が別々の人間によって繰り返し述べられている場合もあり、そのような行動を拾い上げ、その有無を調べた。その行動は、① 登校拒否／学校をさぼる、② 反撃／仕返しをする、③ 自分の性格や考え方を変えるよう努める、④ 体を鍛える、⑤ 平気を装う／じっと耐える、⑥ 逃げる（別のグループに入る／好きなものに没頭する）、⑦ 転校／退学／進学断念、⑧ その他（成績を上げる、友達をつくる）などである。

この他、いじめに対する先生や親の反応を調べるために、⑨ 先生に相談した／先生はいじめに気づいていた、⑩ 親に相談した／親はいじめに気づいていたかどうかについても調べ、その結果は肯定的あるいは否定的なものであったかを識別した。更に、どのぐらいの人々がいじめのために自殺を試みたり、考えたりしたのかを調べる項目も加えた。

## 結果

インタビューと手紙を合わせて全部で166の体験談が分析された。そのうち男性の体験談が41（25%）、女性のが125（75%）であった。これらの体験談の主な年齢は9才から33才で、平均年齢は17.5才であった。被・加害者の別はFigure 1の示す通り、被害者

が圧倒的に多かった。いじめを経験した時期は小・中学校時代が同等に多く、わずかではあるが幼稚園時代からいじめを経験したという人もいた（Figure 2 参照）。それぞれの時期において男女差があるかどうか調べたが、有意差はなかった。

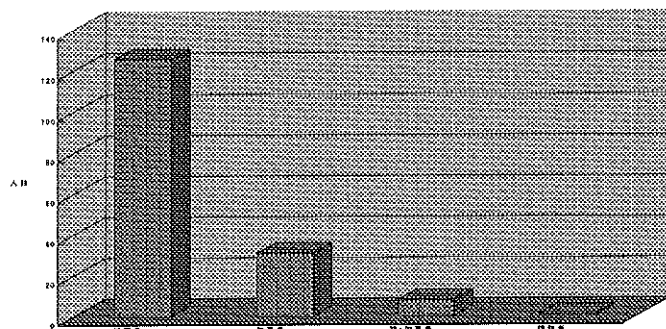


Figure 1: 被・加害者別の人数

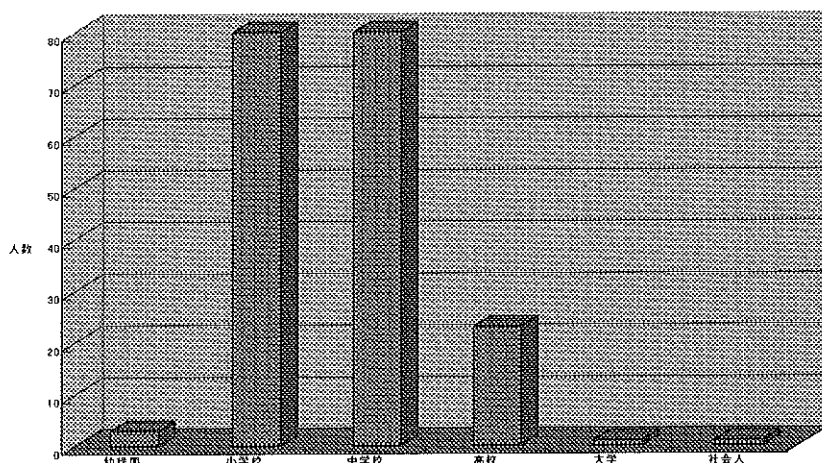


Figure 2: いじめ経験の時期：報告者数

## いじめの形態

森田・清水（1986）方式に従って4種類に分類するとFigure 3が示すような結果が得られた。より具体的な内容を紹介すると、心理的いじめ型に属するものとしては、本人が嫌がるようなアダ名からはじまり、“バイキン”呼ばわり、“死ね”、“学校に来るな”等の罵詈、そして給食を一緒に食べない、体育の時間などパートナーにならない等の仲間はずれ、クラス全員による徹底した無視などである。心理的ふざけ型としては、「上履きを泥だらけにされた」「3階の窓から突き落とされそうになった」「背中に画びょうを刺された」「口に絵の具を無理矢理入れられた」「給食に画びょうを入れられた」「持ち物をゴミ箱に捨てられた」「制服のリボンをカッターで切られた」等である。物理的いじめ型としては、「自転車を貸したら鉄

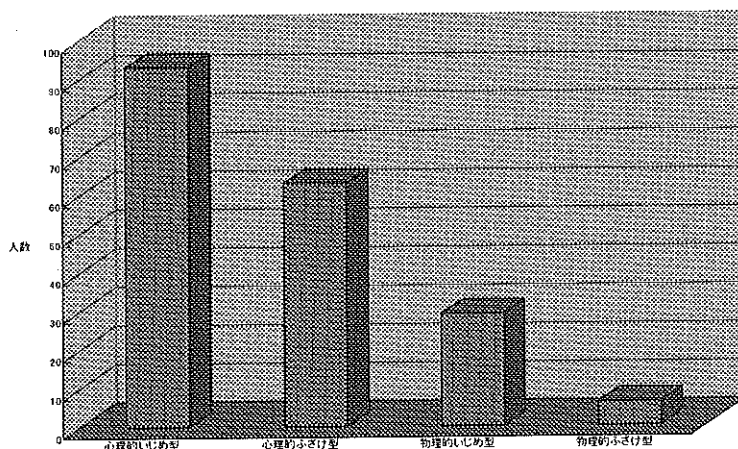


Figure 3: いじめの形態別人数

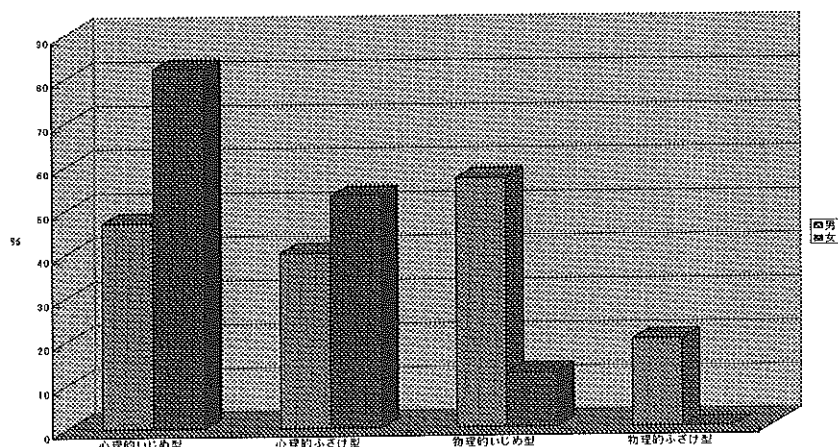


Figure 4: 男女別いじめ形態別出現率 (何らかの理由を述べた人=100%)

屑にされた」「万引きさせられた」「カッターナイフで手首に切り傷をつくられた」、そして物理的ふざけ型としては、「裸にされ、踊らされた」「女の子の前でパンツを脱がされた」「トイレ内で集団で押さえ込まれてホースで水をかけられた」等である。

いじめの形態において男女差があるかどうかを調べたところ、心理的ふざけ型を除いた全ての型において有意差があった。Figure 4に表されているように、心理的いじめ型は男性より女性に多く経験され、女性の82%、男性の47%が経験有りと報告している ( $\chi^2(1, N = 126) = 15.00, p < .001$ )。物理的いじめ型、物理的ふざけ型はどちらも男性に多く経験され、57%の男性が物理的いじめ型のいじめを経験し、これに対する女性の割合はわずか12.5%であった ( $\chi^2(1, N = 126) = 25.16, p < .001$ )。また、物理的ふざけ型のいじめを経験した女性是一人もおらず、経験有りと報告した6人は全て男性であった ( $\chi^2(1, N = 126) = 20.16, p < .001$ )。



いじめの形態といじめを経験した各々の時期の関係を調べて見ると、心理的いじめ型はそれぞれの時期に於いて有意差はなかったが、心理的ふざけ型は中学時代において有意な傾向があった ( $\chi^2(1, N = 115) = 3.83, p = .05$ )。中学時代にいじめを経験した者の59%は心理的ふざけ型いじめを経験していた。物理的いじめ型と物理的ふざけ型のいじめの報告は高校時代にいじめを経験した人に有意に多かった (それぞれ、 $\chi^2(1, N = 115) = 4.40, p < .05$ ;  $\chi^2(1, N = 115) = 7.17, p < .01$ )。高校時代にいじめを経験した人の42%は物理的いじめ型のいじめを経験していて、16%は物理的ふざけ型のいじめを経験していた (Figure 5 参照)。

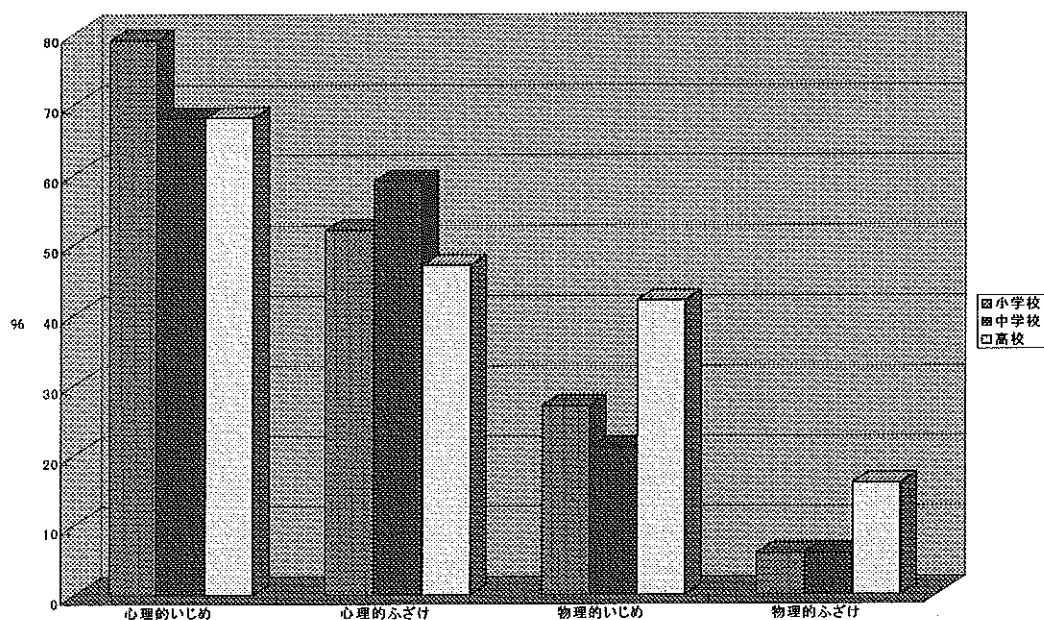


Figure 5: 各いじめ形態の時期別出現率 (%)

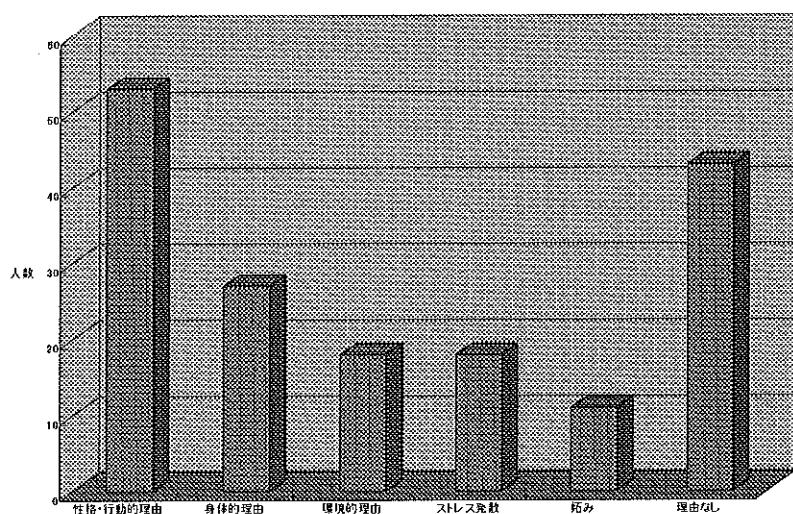


Figure 6: いじめの理由別人数

## いじめの理由

手紙に表れたいじめの理由の頻度数は Figure 6 に示されている。分類された6種類の理由に男女差は見られなかった。被害者と加害者では述べるいじめの理由が違うかどうかを調べるために、それぞれの理由項目について $\chi^2$ 検定をおこなった。その結果は身体的理由とストレス発散において有意差があった。身体的理由を記述しているのは被害者(96%)に有意に多く( $\chi^2(1, N = 118) = 11.31, p < .01$ )、ストレス発散を述べているのは加害者(76%)に有意に多かった( $\chi^2(1, N = 118) = 20.86, p < .01$ )。

## 反応・対策

いじめられた後どのような行動をとったかを記述している人は約半数(87人)であった。その中で最も多かった反応としては、登校拒否や学校をさぼることであった(22%)。87人の20%は何らかの形で反撃や仕返しをしたと報告している。いじめをじっと耐えたと報告しているのは全て女性で16%を占め、有意差があった( $\chi^2(1, N = 107) = 3.93, p < .05$ )。また、少数ではあるけれども、いじめられた後体を鍛えたと報告している人(5人)もいた。これは全て男性で、これも有意差が得られた( $\chi^2(1, N = 107) = 21.48, p < .001$ )。

先生や親はいじめを知っていたかどうかという点に関しては、46人(全体の28%、反応・対策を記述した者の53%)が先生に話した、あるいは先生はいじめを知っていたことを記述していて、そのうちの73%は否定的な先生の反応を報告していた。否定的な反応の例としては、「先生は何も協力してくれませんでした。いじめられているといっても、ずっと見て見ぬふりだったんです。」「僕がいじめられていると訴えると、ヘラヘラ笑って、”ああそうか”で片づけた奴がいたり、”私の知ったことではない”とひたすら逃げるだけの奴もいた。」「担任の先生は私に対するいじめをうやむやにしようとしただけ。」などであった。肯定的な反応の例としては、「担当の先生も親身になってくれ、緊急職員会議を開くなど、解決にむけて全力をあげてくれました。」「わたしに届いた”死ね”という内容の手紙を先生が発見し、ホーム・ルームで問題にした。」などであった。一方、親に話した、あるいは親は知っていたと記述していた人は30人(全体の26%、反応・対策を記述した者の34%)で、そのうちの59%は肯定的な記述であった。親の肯定的な反応の例としては、「いじめている男の子たちの名前をすべて親に話しました。父親が学校に飛んでいき、かなりキツく先生方にいじめの状況を訴えたそうです。それから学校へ行っても、いじめられることはなくなりました。」「私に対するいじめは、ある日を境にピタリと収まった。父親がかなりキツく、学校に怒鳴りこんでいったんです。」「そのうち私のいじめは両親にもばれ、”お前は最低の行為をした”とこっぴどく叱られた。私は深く反省した。(加害者)」などであった。否定的な親の対応としては、「学校側はただ”気にするな、お前はただ人間不信だ”と言うだけ。家族からも同じことをいわれて、おこられてしまいました。」「親に話しても、まるで信じてくれません。」などであった。

自殺に関する記述をした人は21人(全体の13%、反応・対策を記述した者の24%)で、そのうち7人は実際に自殺を試み、残りの14人は自殺を考えたことがあったと記述している。これに関し有意な男女差はなかった。また、いじめの形態別の差異もなかった。

## 考察

本研究では従来の実態調査とは少々違った方法でいじめの実態を把握しようと試み、「ジャンプいじめりポート」に掲載された全国各地からのいじめ経験者の手紙の内容を分析した。分析された体験談は女性のもの、被害者からのものが多かったが、これは自発的な手紙という性質上やむを得ないものであろう。「いじめりポート」の参考資料によれば、寄せられた手紙1807通の76%は女性からのものであり、分析された体験談は男女別の割合においては全体を代表しているといえることができる。

内容分析の結果、いじめは小・中学時代が頻繁で高校になると急激に減少し、いじめの種類としては悪口や無視、嫌がらせや小暴力などの心理的いじめ・ふざけ型のいじめが多かった。これは、森田・清水(1986)が得た結果と一致している。森田・清水は、小・中学生を使った調査で心理的いじめ型、心理的ふざけ型、物理的いじめ型、物理的ふざけ型の順に発生認知率が高いという結果を得た。本研究でもこの順番で経験頻度数が高いという結果を得た。また、本研究では、心理的いじめは特に女性が多く経験し、身体的攻撃やお金をゆするなどの物理的いじめ・ふざけは男性が多く経験するという結果を得たが、いじめの方法における性差は深谷(1996)も同様に報告している。

心理的ふざけ型のいじめを経験した者は中学時代にいじめを経験している者に多く、物理的いじめ・ふざけ型いじめを経験した者は高校時代にいじめを経験している者に多いと言う本研究の結果はいじめの形態が成長年齢に従って変わってくることを示唆している。深谷(1996)は、小学校から中学校にかけて、ゲーム型いじめ(悪口、無視・仲間はずれ、物を隠す)から非行型いじめ(暴力、物を壊す、カツアゲ)へ移行していくと述べているが、年齢が上がるに従って小暴力を含む心理的ふざけ型、暴力やおどし等を含む物理的いじめ・ふざけが多くなるという本研究の結果は、深谷の結論を支持するものである。

いじめの理由は6種類に分けたが、そのうち性格・行動的理由、身体的理由、環境的理由はどちらかというときっかけといったもので、その根底には「異質排除」の心理があったり、「妬み」や「ストレス発散」といった他の理由とも密接に関わりあっている。例えば、性格的理由として良くあげられた「目立つ子だった」という理由の根底には「妬み」の心理が含まれていると考えることもできるし、「おとなしい性格だった」という理由は「異質排除」というよりも、「ストレス発散」の対象として選びやすかったと解釈することもできる。また、「理由なし」というのは結局「ストレス発散」と見ることができる。こうした見方をすると、体が小さい、障害がある等の身体的理由をあげたのは被害者に多く、ストレス発散をあげたのは加害者に多いという本研究の結果は、被害者のあげた「身体的理由」は加害者にとっての「ストレス発散」と表裏一体であるといえることが出来る。つまり、被害者は加害者が欲求不満の状態にあるのかどうかかわからないので、何らかの理由を捜そうとし、コンプレックスも手伝って自分の身体的特徴が原因だったと思っている。しかし、加害者にとってはそうした特徴はいじめの対象として選ぶめやすくなるだけであり、本当の理由は諸々のストレスなのである。

こうして見ていくと、いじめの理由は究極的には「異質排除」「ストレス発散」「妬み」の3つに集約されるといえる。ストレス発散のために攻撃行動に及ぶというのは、欲求不満-攻撃仮説(frustration-aggression hypothesis)によって説明でき、桜井(1986)がいじめとの関連性を含めて詳しく述べている。「妬み」も jealousy という意味においては、自分の正当性

を主張するが自分の思い通りにならない感情で（土居・渡辺，1995）、自分の思い通りにならないという点では欲求不満につながり、攻撃性を高めることはうなずける。しかし、「異質排除」の心理がなぜ攻撃行動に結びつくのかは明らかにされていない。異質なものを区別するというのは認知の発達においてあたりまえの過程であるが、異質と認知したものを自分より劣ったもの、悪とみなし攻撃する行動は未熟な人格のあらわれと見ることができる。つまり、自我がまだ確立されていない小・中学生にとっては、他と違うこと、異質であることは必要以上に「悪」と写る。そして、青年期に入り自我が発達してくると、特別であること、異質であることはそれ程「悪」ではないことが理解されるようになる。こうした人格の発達に伴う「異質排除」の攻撃性の変化は、いじめが高校時代には大幅に減るという本研究の結果を容易に説明するものである。また、この未熟な人格は単に人格の発達のなものによるだけではなく、現代の子供の自己有能感の欠如（桜井，1986）が大いに影響しているともいえるだろう。なぜなら自分に自信があれば、自分とちがった者を単にちがった者と見なすにとどまり、攻撃することによって自分を正当化したり、優越感を感じたりする必要はないのであるから。

更に、「異質排除」が攻撃行動に結びつく背景には、河合（1997）や深谷（1995）が示唆しているように、日本の社会風土もあげられる。日本社会はタテ組織の社会であり、そのため日本社会における集団は孤立性が強く、現実行動においては極端に排他的である（中根，1967）。この排他性は日本社会が単一性がつよく、集団が資格によってではなく場によってできているので、つねに他とは違うということを強調しなければ他との区別がつかなくなるからだ、中根（1967）は分析している。この様に、異質排除の心理は日本社会に深く根をはっていて、大人の社会においても良く見られることなのである。ゆえに、親、教師、テレビなどは子供にとっては強力なモデルとなり、子供の行動に多大な影響を与えるという社会学習理論（Social Learning Theory）によれば、いじめは子供たちが異質なものを攻撃するのは当たり前のことであると社会から学んだ結果として表れたものとも考えられる。

いじめの影響については、全体の約13%は自殺を実際試みたり考えたりしたことがあり、22%は登校拒否になったり、学校をさぼったりという結果を示している。これは自発的に手紙に書いている人の割合であり、もし、このいじめ体験者全員に質問形式で尋ねたならば、もっと高い数値が得られることが予想される。いずれにしても、この結果はいじめの深刻さを物語っているといえる。こうした深刻ないじめにどのように対処していったかという体験談は、いまだにはびこっているいじめに対して参考になると思われるので、ここで少し取りあげてみたい。まず、本人ができることとしては、体を鍛えること。これは特に男の子の場合有効なようで、5人の男性が体力的に強くなったことでいじめが終わったことを報告している。多くのいじめ体験者がいじめられた原因、あるいはいじめられっ子の特徴として、「オドオドしている」「気が弱い」等をあげていることから、これは体力的に強くなることで自信がつくということも作用していると思われる。女の子の対応としては、いじめが終わるのをじっと耐えるというのが多かったが、そうした中にも、話せる友だちの存在が助けになったと報告している人もいる。例えば、ある被害者の女性は「友だちがひとりいるだけで、いじめによる苦しみは確実に半減します。」と書き、また別の女性は「そんなクラスでも2人ほど仲良くしてくれる女子がいました。彼女たちの存在がどれほど私の助けになったか …。」と記述している。

何らかのかたちで先生がいじめを知っていたという人の73%がその先生はいじめの解決に何もしてくれなかったと記述していたが、これは驚くべき高い数値である。更に、先生にいじめられた、先生が率先していじめたという報告もいくつかあり、教師と生徒の信頼関係が薄いことを表している。親に関しては、肯定的対応のほうが多かったが、約40%の親が娘や息子のいじめを知っていて何もなかったというのは驚きである。こうした先生や親の否定的対応の高い数値の背景には、子供たちが先生や親に期待し助けを求めている心理がひそんでいる可能性もある。

本研究で分析された手紙はすべて出版社によって発刊された間接的データであり、ほとんどの手紙は回顧的なものであるから回顧的報告としての弊害は免れえない。また、出版社によせられた自発的な手紙という性質上、手紙に書かれていることが必ずしも経験したいじめの全てではないという弱点を含んでいる。しかしながら、本研究の結果はいじめ問題に対して重要な示唆を含んでいる。本研究では、いじめの理由が大きく分けて「ストレス発散」「妬み」「異質排除」の3つであることを示した。これらの理由はみな日本社会の特徴と密接に関係していて、原因がわかったからといってすぐに解決に至るというわけにはいかなそうである。たとえば、いじめをなくすためにはまず現代の子供たちが感じているストレスを取り除かなければならないということは明らかであるが、そのためには、棚瀬(1986)がいうように、日本の社会が根本的に変わらなければならず、長い時間がかかりそうである。しかし、現在の段階で出来ることもあり、本研究の結果は、教師や親のいじめ対応能力の開発・促進がそのひとつであることを示唆している。教師や親がいじめ問題をどのように対処するかの研究・研修を積んで、いじめ問題に直面した時には的確に対応できるようにすることが今できることのひとつであろう。そのためには、より具体的で有効ないじめっ子、いじめられっ子への対応の仕方を記したマニュアルのようなものを作成し、それを教師・親に広く浸透させて行くのも一つの方法かと思われる。

## 引用文献

Boulton, M. J., & Underwood, K. (1992). Bully/victim problems among middle school

children. *British Journal of Educational Psychology*, 62, 73-87.

土居健郎・渡辺昇一.(1995). いじめと妬み：戦後民主主義のおとし子. 東京：PHP

研究所

稲村博.(1986). いじめ問題：日本独特の背景とその対策. 東京：教育出版

井上敏明.(1986). 学校ストレスの深層：いじめ問題の背景を探る. 京都：世界思想社

石崎一記.(1986). 弱い者いじめの実態. 高野清純(編著). いじめのメカニズム

(pp. 23-50). 東京：教育出版.

河合隼雄.(1997). 子どもと悪：今ここに生きる子ども. 東京：岩波書店

深谷和子. (1995). 学校と地域における人間環境の破壊 — 「いじめ」問題の発生を例にし

て— 日本家政学会誌, 46, 697-701.

深谷和子. (1996). 「いじめ世界」の子どもたち — 教室の深淵. 東京：金子書房.

毎日新聞社会部編. (1995). 総力取材いじめ事件. 東京：毎日新聞社.

森田洋司・清水賢二. (1986). いじめ：教室の病い. 東京：金子書房.

中根千枝 (1967). タテ社会の人間関係：単一社会の理論. 東京：講談社.

Olweus, D. (1994). Annotation: Bullying at school: Basic facts and effects of a school based intervention program. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 1171-1190.

桜井茂男. (1986). 弱い者いじめと攻撃. 高野清純 (編著). いじめのメカニズム (pp. 79-104). 東京：教育出版.

鈴木康平. (1995). 学校におけるいじめ. 教育心理学年報, 34, 132-142.

詫摩武俊. (1995). いじめ — のりこえるにはどうするか — 東京：サイエンス社.

田中喜美子. (1996). いじめられっ子も親のせい！？ 東京：主婦の友社.

棚瀬一代. (1986). 中学生のホンネ：インタビューを通して. 大阪：創元社.

土屋守 (監修)・週刊少年ジャンプ編集部 (編). (1995). ジャンプいじめリポート：1800 通の心の叫び. 東京：集英社.

渡辺弥生. (1986). いじめをつくりだすもの. 高野清純 (編著). いじめのメカニズム (pp. 51-77). 東京：教育出版.

矢部武. (1997). アメリカ発いじめ解決プログラム. 東京：実業之日本社.